

## 英語教育における科学的研究とは

広島大学 小 篠 敏 明

英語教育における科学的研究の特徴については種々の方向から議論することができようが、われわれは具体的かつ帰納的アプローチを試みた。即ち、科学的研究の「あるべき姿」について観念的に論ずるのではなく、現実に研究室で進行中のプロジェクトについて具体的に言及し、そこから帰納的に導き出され得る特徴を科学的研究の実際の姿として提案しようとしたのである。本報告では、提案に基づき、まず、われわれのプロジェクトについて言及し、続いて、科学的研究の特質について論じたい。

### プロジェクトの概要

われわれの研究を動機づけている問題意識は「教師養成システムの中でいかにして学生の授業能力を高めるか」というものであった。このような認識からわれわれは「熟練教師の名人芸といわれる授業にいかにして科学的にアプローチし、これに近づき、これを越えることができるか」というテーマに取り組んだのである。

熟練教師の立派な授業にかかわっている重要な因子として、われわれは(1)学習者の学習状況及び学力の把握、そして、(2)授業のスキルを取り上げ、追求していくこととした。

#### (1) 学習状況の把握

学習状況の把握は授業の巧拙を分ける決定的因子のひとつである。ベテランの教師は長年の教授経験を通じて学習者の学習プロセス、学力の実態を具体的な形で正確に把握しているため、ある特定の指導項目のどこが学習者にとって困難であるかをかなり正確に予測することができるのである。このため、ベテランの教師は困難点を重点的に教え、時には、意図的に生徒に誤らせ、そこに注意を集中させるようなテクニック (negative example : Corder) さえ用いることができるのである。他方、教育実習生あるいは未熟教師は教授経験の乏しさからこの種のデータを保有していない。今日教える教授項目について学習者がどのようなエラーをおかすのかを予測し、これに備えるための情報を全く持っていないのである。このような、学習者に関する情報の欠如は、ベテラン教師の情報量と比べると、決定的な差となって現われてくるのである。

未経験教師がベテラン教師の名人芸に近づくための第一歩は、したがって、彼らの持っている学力情報をいかにデータ化するかということになる。それも、一般的情報ではなく、各学習項目(目標)ごとの具体的なつまずきの実態を知らせてくれる情報でなければならない。つまずきに関するデータは教材研究、教授過程づくりに不可欠の要素である。

以上のような問題意識を背景として、われわれは「中学英語誤り集」のプロジェクトに着手した。具体的には、次のような手順を経て、中学校英語コースで教えられるほぼ全項目に関して誤りの実態を分析・収集することとしたのである。それは、(1)テスト項目(教授項目)の決定、(2)テスト問題の作成、(3)テストの実施、(4)誤りの分類、分析、(5)新しい問題点の抽出、(6)新しい困難点の再調査、(7)誤りの重要度の決定、である。

学習者がつまずくであろう箇所を一定の合理性、科学性をもって予測する——これは経験の浅い教師にとっては「わかる授業」を行うための不可欠の条件である。こう考えてくると、このプロジェクトの教師養成における価値は計り知れないものがあるように思われる。このデータ・ベースが実用的価値を持つためには膨大な量の、しかも広範囲にわたるデータを組織的、体系的に取

集することが絶対的に必要である。われわれの研究室では、卒業論文を中心に、組織的にこのプロジェクトに取り組んでいる。

## (2) 授業の分析

ベテラン教師の名人芸の秘密を解き明かす鍵は授業自体の中に隠されているというのがわれわれの信念である。ベテラン教師と未熟練教師の授業を比べてみると、教授行動の種々の側面において両者は大きく異なっていることに気づくのである。この違いを具体的に分析・記述し、データとして蓄積できないか、というのがわれわれの認識である。

授業の分析は、試行錯誤の段階であるが、文献研究により一定の方向づけを行った後、現在、二つの方向からアプローチを試みている。それは、(1)授業の全体像の分析と評価、及び、(2)授業の特定側面の分析と評価である。前者がマクロの総合的アプローチであるのに対して、後者はミクロの個別的分析アプローチであり、両者は相補的關係に位置づけることができよう。

授業の全体的分析・評価においてわれわれが採用した研究の方向は「教科（英語科）教育学の内容と密接な関係を保つ形で分析を進めるということである。それは、第一に、分析を教授内容や教授過程と結びつけて行うこと、第二に、教科教育学の基本概念を視点として分析すること、を意味する。このような観点から、われわれは録画した教生の授業を材料として、種々の観点から授業を考察してきた。具体的には、教授行動及び教授過程の妥当性などに関して、生徒の反応に照らしてグループで検討を積み重ねていった。そして、そのカード化されたコメントをいくつかのカテゴリーにまとめ、授業評価の視点表を作成することにした。つまり教生の授業を出発点として、帰納的に授業評価システムを作成しようと試みたのである。この方法を長期的、組織的に繰り返すことによって、究極的には、組織的、包括的な授業評価の枠組みを完成させることができる」と期待している。

特定側面の分析・評価においては、さきのマクロの分析で問題になった特定の側面について、焦点を絞り、細かく分析、検討していくのである。たとえば、主要な教授法のひとつであるパターン・プラクティスあるいは口頭導入または形成的評価などの項目を選び、どこが、なぜ難しいのか、そして、どうすれば解決されるのかを具体的に検討していくのである。

以上が、現在、われわれが組織的に進行させているプロジェクトの概要である。もしこの研究が科学的研究と呼ばれ得るものであるとすれば、ここからいかなる方法論的特徴が帰納され得るであろうか。筆者は、それを「組織的、体系的、長期的」と呼びたいと考えている。

まず、第一に、われわれの研究は研究室を単位とした組織的共同研究の体制をとっている。研究は、本来、複数の研究者からなるチームで行うほうがより総合的、客観的研究となる。その意味では、組織的研究の方が科学性を高めるといってもできよう。このことは個人研究を非科学的として否定するものでは決してない。個人研究も、先行研究のレビューに基づき、そのコンテキストの中で行われる限り、別の意味において組織的といえることができるからである。

第二に、「体系的」とは一連の組織研究が一定の問題意識を共有し、一定の基本的方法を共有していることを意味する。体系的研究の下ではひとつのテーマが各種の視点から統合された形でアプローチされ、その結果、より総合的な解明が期待できるのである。

第三に、「長期的」とは、文字通り、一定期間、問題意識、対象、及びアプローチが継続されることを意味する。組織的、体系的研究を進めることは必然的に長期的な研究を行うことを意味する。具体的には10年をひとつのメドとすることができるだろう。

このように考えてくると、英語教育における科学的研究とは、英語教育を愛し、これを皆で進展させようとする執念といえるかもしれない。